

# 生涯学習と文化財

安藤 信策

## 1 はじめに

当埋蔵文化財調査研究センターは発足してから本年度10年の年月を数え、この間には380ヶ所を越える遺跡の発掘調査と、コンテナ箱で1万箱以上の多量の遺物を収蔵するに至っている。それぞれの遺跡の調査成果は京都府内の各地域の歴史の解明に新しい頁を加えるものであり、また全国的にも注目される幾多の発見がなされた。その調査成果による研究の一端は本論集によっても知られるところである。このような調査と研究の成果は各調査員の努力の結果であるが、それとともに調査の労苦を共にした作業員、補助員、整理員、事務職員その他多くの方々の協力の賜物であることを銘記しなければならない。

ところで当センターは本務である発掘調査の他、遺跡の現地説明会、出土品の展覧会、考古学に係わる研修会、講演会、遺跡の現地見学などの普及活動にも積極的に取り組んできた。毎年夏に開催して、前年の発掘調査成果を紹介する「小さな展覧会」は1989年で8回を数え、本年すなわち1990年12月には第59回研修会が開かれている。これは遺跡の調査成果をできるだけ多くの府民の方々に知っていただき、遺跡調査の意義について幅広い社会的コンセンサスを得るための活動である。それとともに古代史や考古学に関心の高い方々の知見を一層深めていただくための活動でもある。

発掘調査の成果は、研究者にとっての学問的な意義と、もう少し広い一般の人々にとっての社会的な意義があると考えられる。近年、生涯学習の重要性が提唱されており、京都府においても1990年の秋、第2回生涯学習フェスティバル(まなびピア90・in京都)が開催され、生涯学習時代の自覚が高まっている。このような時点で遺跡・遺物を中心とした文化財の社会的な意義について生涯学習という視点から述べてみることにしたい。

## 2 京都・古代との出会い

府民の方々は遺跡・遺物に対してどのような関心を持っておられるだろうか。遺跡の現地説明会の際には毎回数十名、多い時は百名を越す人々が参加され、熱心に調査員の説明に耳を傾ける姿を見ることが出来る。各遺跡に対する関心の高さは記者発表後の新聞での扱われ方の大きさにも左右される。しかし「荒神谷遺跡」「景初四年銘鏡」「吉野ヶ里遺跡」

といったその時々の大発見にも触発され、古代史に対して多くの人々が持続的な、また幅広い関心を寄せていると考えることができる。

当センターでは毎年の「小さな展覧会」に替えて本年は、設立10周年を記念する特別展「京都・古代との出会い」を1990年8月8日から9月2日まで京都文化博物館を会場として開催した。この特別展の主催は当センターと京都府教育委員会、京都文化博物館の3者である。しかし展示計画や図録の作成、資料の借用と展示など展示業務の中心作業は当センターの職員が平良泰久資料係長を中心とするスタッフをつくって実行し、当センター理事である佐原眞先生に熱意ある御指導をいただいた。特別展は幸い好評をもって迎えられ会期中8,119名にのぼる入館者があった。また入館者をお願いしたアンケートに対しては55.9%にあたる4,536名の方から回答が寄せられた。このアンケートは遺跡・遺物の展示に対する一般の方の関心を知りうる良い機会ともなった。このアンケートによって一般の方々がどのように古代と出会われたかをみてみよう<sup>1</sup>。

この展示を構成するにあたっては次のような特色をもたせることとした。

(1) 私達の日常の暮らしに関係の深い展示とするため、生活に結びついた12のテーマに分けて展示する。(2) 展示に係わる解説やネームカードなどは出来るかぎり平易なものとする。(3) 復元模型やイラスト、写真パネル、ビデオなどを用いて、遺跡の当時の姿や発掘の状況、遺物の復元の方法がわかるようにする。(4) 出来るだけ露出展示とする。家形埴輪、馬形埴輪、蓋形埴輪、円筒埴輪など多くの埴輪を露出展示とした。また完形の土器や瓦に実際に触れていただく「古代とのふれあいコーナー」を設置した。

このような展示の特色は多くの方が、新しい試みとして高い評価をされた。特に人気があったのは「古代とのふれあいコーナー」で約100の方が展示物に実際に触れることが出来て良かったとの感想を書かれている。たとえば、「始めて須恵器にさわりました。かたいやきですね。いい経験でした。ありがとうございました。ふれるコーナーがこれからもあるといいですね。」との声、また「全体として解りやすくという視点で構成され、人間の暮らしの見える展示となっていて大変感銘をうけました。」との感想があった<sup>2</sup>。

テーマ別の展示については53の方が良かったと評価された。今回設定したテーマは「京都の人」「住まい」「王と民」「戦い」「つくる」「うつわ」「都」「音」「文字」「遊び」「花」「調査研究10年」である。平易な解説については39の方が良かったと感想を書かれ、イラストやビデオについては35の方が評価の意見を書かれた。特に力をいれた埴輪群の露出展示については25の方が好意的な意見を添えられていた。また「館の方に親切に説明していただいて良かった。」との感想もある。

これに対して、展示の構成に「系統性がない。」とか「時代順の展示が良い。」「地域別

展示が良い。」との意見があり(合計41名)、さらには「易しい解説の中にも専門的な用語や解説も必要。」との意見(17名)、「地図の多用が必要。」との指摘など、遺跡と遺物によって歴史の流れを具体的に汲みとろうとする、入館者の真剣なまなざしが感じられる率直な批判や指摘をいただけたのも有り難いことであった。

アンケート回答者の男女の比は男52.3%、女47.7%でほぼ半数ずつである。回答者の年齢は20代が最も多く(1,123名)、次いで40代(736名)、50代(645名)、30代(625名)、の順であった。20代では女性571名、男性552名であった。地域別では京都府内58.3%、他府県41.5%、外国人0.2%である。他府県の人が多く、また20代の女性が多かったのは京都市内を観光で訪れ、博物館に来られた人の一つの傾向であるのかもしれない。また外国人の姿が見られたのも京都市内の博物館ならではの特色であるが、これに対しては「外国人の対応に欠ける。」との意見があり、国際化時代の展示の今後の課題の一つと言えよう。

回答者の職業は主婦855名、会社員854名、公務員633名、次いで大学生539名、小学生286名、教員272名、その他548名という内訳であった。ただし公務員とその他には教員が一部含まれている。また、今回の特別展は夏休み期間中であったので小・中・高校生の入館が期待されたが、数字的にはいま一つ伸びなかったのは残念であった。しかし入館した子供達には、「夏休みの勉強になって良かった。」という感想が多く(11名)、わりあい興味をひく展示であったようである。そうした子供達は、「すごくおもしろかったですね。Good、Goodでしたよ。」(13才女)、「美しいものがたくさんあったのでとてもよかったです。」(13才女)、「何回みてもあきないし、勉強にもなるので来てよかったです。」(12才男)、「つくった人のくふうがよくわかった。」(12才男)、「ばらばらなのによくくっつけてすごい。むかしの人はどんなくらしをしていたのかもっとしりたい。」(7才男)などといった感想を書いてくれていた。「夏休み以外であったら、生徒を連れてきて歴史の勉強をさせたかった。」との先生の意見が書かれていたように、歴史の生きた教材として、また勉強ということを離れても、面白い、興味をひくものとして、遺跡や遺物は子供達にとって宇宙船のように大きな可能性を秘めたものではないだろうか。

さらに、「この展示を見て埋蔵文化財の保護の必要性を痛感した。」(11名)、「常時こうした展示が見られる施設が必要。」(14名)などの意見を寄せていただいた方があり、こうした展示によって、遺跡・遺物の調査と保存の意義が一層広く、深く理解されていくのだということを改めて確認できたのである。また、「中近東の風雲の時、しみじみと平和を感じる。」という感想があったのが心に残った。遺跡の調査が出来るためにも、出土遺物を展示するためにも平和な時が必要である。感想を書かれた方には、また別の深い思いがあったのかもしれない。特別展においても「戦い」のコーナーを設け、鎧兜が埋められた

法住寺殿遺跡の復元模型などは人々の関心を集めていた。お盆があり、終戦記念日がある8月の展示期間において、平和の尊さへの感想は特に貴重なものに思われた。このように特別展「京都・古代との出会い」は京都府内外の多くの方々に興味を持って見ていただくことが出来た。古代の遺跡と遺物からさらにどのようなことを感じられたのかは、短いアンケートの感想の中では表現しきれないものであろう。私達の身近な所にある遺跡・遺物はどのようなことを私達に語りかけてくれるのか、遺跡・遺物の語りかけを私達の社会にどのように生かしていけばよいのか、遺跡・遺物に係わりの深い私達の課題は大きい。

### 3 生涯学習の今

今日、社会教育あるいは学校教育の分野において生涯学習への関心が大きな高まりを見せている。公民館、文化会館、図書館、美術館、資料館、博物館、植物園、動物園、水族館などの文化施設あるいは教育的公共施設の活動においても、生涯学習を視野に入れて考えることが必要となっている。

ところで生涯学習と言う場合と、生涯教育と言う用語とがあるが、この両者はいわば受け手と送り手とに焦点をあてた言葉であって、意味する概念は同じであると考えられる。現在は、学習する側の立場を尊重し、主体的な取り組みを期待する意味で、生涯学習という言葉の方がよく用いられているようである<sup>3</sup>。

さて生涯教育という理念が最初に提唱されたのは1965年、パリのユネスコ本部で開かれた第3回成人教育推進国際委員会に提出されたユネスコ生涯教育担当官ポール・ラングランの基調論文においてであると言われる。わが国における生涯教育という用語は、上記の会議に参加した波多野完治が「生涯教育」という日本語をつくってラングランの論文を訳出し、1967年3月、日本ユネスコ国内委員会から「社会教育の新しい方向」という題のもとに出版されたのが始めである<sup>4</sup>。

生涯教育ということ始めて提唱したラングランは、人口の増大、科学的知識及び技術体系の進歩、マス・メディアによる情報の増大、余暇活動の増大といった現代文明のさまざまな側面を今世紀における現代人への新しい挑戦として捉え、このような中で教育は全く新しい段階に入ったことを指摘した。すなわち教育はその真の意味を再びまとおうとしているのであるとして、教育の実際の任務を次のように定義した。「・人間存在を、その全生涯を通じて、教育訓練を継続するのを助ける構造と方法を整えやすくすること。・各人を、彼が、いろいろな形態の自己教育によって、最大限に自己開発の固有の主体となり固有の手段となるように装備させること<sup>5</sup>。」

そしてラングランは、科学技術の進歩を始めとする社会のあらゆる変化への適応性の教育、

幸福への教育、生活の質の向上のための教育といった生涯教育の目的をいくつか挙げているが特に、平和と国際理解の教育をとりあげていることに注目したい。ラングランは個人に平和の精神を教え込むことは教育の究極的な目的と結びついていると考えた。このように生涯教育の理念と課題は早くから提唱され、今日に受け継がれている。

わが国では1971年5月に社会教育審議会の最終答申が出され、生涯教育について具体的、詳細に論じられた。また同年6月には中央教育審議会の最終答申が出され、その前文の中で「生涯教育の観点から全教育体系を総合的に整備すること」が基本的な考え方として挙げられたのである。また1981年には同じ中教審が「生涯教育について」という答申を出し、その中では、「人々の生涯を通ずる自己向上の努力を尊び、それを正當に評価する、いわゆる学習社会の方向を目指すことが望まれる。」と述べられている。<sup>7</sup>

こうして1980年代には生涯教育が教育全体のシステム化の原理として承認され、生涯教育の具体的施策化が求められるようになったのである。多くの府県では社会教育行政の中心的な方向を生涯教育の実現に求めている現状にある。1980年には生涯教育学会が発足し、1985年7月には文部省に生涯学習局が設置されている。

1990年10月31日から11月5日までの6日間にわたって国立京都国際会館、京都府総合見本市会館、京都会館などを会場として第2回生涯学習フェスティバル(「まなびピア90・in 京都」)が開催された。フェスティバルでは教育、文化、芸術、人間、人生、映像、スポーツ、健康などの各分野にわたってシンポジウムや講座、講演会ほかの119の事業が行われた。その内容は大変多彩であって、生涯学習のいわば裾野の広さと多様さを表わしている。

人々の学習へのニーズは多様である。職業生活の中で、また家庭生活の中で一層自らを高めたいとの願望から、さまざまな分野の学習が求められる。また健康を維持し増進させたいという願望から取り込まれるスポーツ活動、そして精神の充実のため、あるいは心の楽しみのための文化活動や芸術活動、いろいろな趣味の分野など実に多様といえる。あるアンケート調査によれば希望する学習内容としては、まず芸術・芸能・趣味の分野、ついでスポーツ、そして自らの職業に関する事、そのほか外国語、一般教養、家政、健康などの順であった。やや古い調査資料であるが一つの傾向を知りうるアンケートである。<sup>8</sup> また同様のアンケートでは、余暇活動で比較的良好に利用している公共施設として、公民館、屋内・屋外運動施設、公園・緑地、市町村会館・地区集会所、小・中学校などが挙げられていた。個人の学習の場として適している図書館や博物館・美術館は、利用している施設としては順位がまだ低い。しかし作って欲しい余暇活動のための施設としては公園や運動施設と共に高い順位で挙げられていることに着目したい。

現代は生涯学習が切実な課題となる社会である。その理由のいくつかを挙げてみよう。

(1)技術革新—科学技術の急速な革新によって身の回りに次々と新しい機械や道具が登場し、学校時代に学んだ知識を絶えず補足し充実させる必要があること。

(2)長寿社会の到来—医療の進歩や生活環境の改善により平均寿命が延び、男女とも第2、第3の人生が可能となったこと。

(3)女性の社会参加—女性の地位が向上すると共に社会参加の機会が増加した。女性の社会参加は時代の趨勢であり、時代の課題である。新しい社会を築くパートナーとして、今後の一層の社会参加のために、学習機会の増大が望まれている。

(4)余暇の増大—技術革新の成果を中心に労働時間の短縮が可能となり、余暇が増大したこと。

(5)情報化社会—種々のメディアや情報機器の発達によって、世界的な範囲でいろいろな情報を入手できる情報化社会が到来したこと。これは全ての人々に対して学習の場が広く開かれたことを意味する。

(6)変貌する社会—現代は20世紀から21世紀への変革期にあり、科学技術の進歩、価値の多様化、国際化など様々の要因によって世界的な規模で社会が変貌している。未来の社会への展望はまだ開かれていない。

(7)失われる伝統—変貌する社会の中で、衣食住などの生活様式や祭りなどの信仰の形態、都市空間が刻々と変化し、それと共に各国において伝統的な民俗や生活用具が失われていること。

(8)地球環境の悪化—欧米や日本など少数の先進諸国の工業生産、車社会などを主な原因として酸性雨、オゾン層の破壊、熱帯雨林の減少、地球温暖化など様々な自然破壊が進み、地球環境が急速に悪化していること。

このような激動の時代において、世界的な展望を持ち、国際的に協力し合って、危機的な状況を少しでも打開し、地球環境を護り、より良い社会をつくっていくためには学校教育の中で学ぶだけでは足りないことは明らかであろう。子供から大人までいろいろな機会に学ぶことが出来る生涯学習社会の建設が必要であり、それによって積極的に行動する国境を越えた市民、いわゆる世界市民が一人でも生まれることが望まれるのである。

#### 4 生涯学習と文化財

変貌する世界に対応するため生涯学習社会をつくっていかなければならないという視点からみて、文化財はどのような意味をもっているだろうか。

遺跡や遺物などの埋蔵文化財、歴史的建造物、絵画や彫刻、古文書、有形・無形の民俗文化財等々の文化財はいずれも広い意味で人類の歴史の中で生み出されたものであり、今

日のような世界的な歴史的変革期にあってはとりわけて生涯学習の対象として適切なものであるといえよう。しかも文化財は私達の身の回りに広く存在しており、あらゆる場で、いつでも学ぶことが出来るのである。とはいえ学校教育における学校のような拠点的な場がやはり必要であって、そのような場こそ文化財を収蔵し展示している資料館・博物館にはかならない。資料館・博物館は気軽に足を運べて自由に学ぶことのできる開かれた生涯学習の場である。生涯学習時代の到来という時代の要請のなかで、資料館・博物館は社会の中でこれまで以上に積極的な意味をもってきたといえよう。資料館・博物館、図書館、公民館、美術館、音楽ホール、体育館、公園、植物園などの公的文化施設を生涯学習の場として充実してゆくこと、それは国と府県、また市町村に課せられた行政的な課題となっている。近年、府県や市町村が巨費を投じて博物館や美術館などを競って建設しているのは生涯学習時代という観点からの積極的な町づくりとして高く評価できる。

ところで児童を育成する近代学校教育の場合は、明治初年以来すでに百年以上の歴史をもっている。一方、これまで社会教育として位置づけられていた、成人を主な対象とする生涯学習の場合はその歴史もまだ浅く、行政的にも学問的にも法的にも十分な整備ができていない。実務にあたっている担当者は、様々な課題を担って模索を続けているのが現状であろう。生涯学習の内容としては、各人の生活と仕事に結びついた、あるいは地域に根ざした実に多様な人文科学、自然科学の各分野にわたるであろう。大学や研究機関との連携が是非必要となる。そして公的文化施設の担当者はそれぞれの専門家として研修を積むと共に、各文化施設は生涯学習機関として協力しあうことも今後の課題である。

文化財は生涯学習における重要な分野として豊かな可能性を秘めている。むろん学校教育においても積極的に文化財から学ばねばならないが、人生経験を積んだ成人にとっては文化財から汲み取られるものはいっそう大きいという側面がある。また文化財は、地域の自然環境および歴史的環境と一体となっており、人々と地域をつなぐ架け橋となる存在である。私達の住む地域の文化財から学ぶことを出発として、各地域の文化財への旅によってこそ、私達の視野は空間的にも時間的にも広がってゆく。各地域の歴史の中から生みだされた文化財との対話は、そこに住み続けていた多くの人々との対話でもある。そうした対話を通して私達がどこから来て、何処へ行こうとしているのかを知れば、私達が孤立した存在ではないことがよく分かり、現代の困難な時代において協力しあい、手をさしのべ合うことが出来るのではないだろうか。生涯学習の目指すものはたんに自らを高めるばかりではなく、現代の問題を少しでも解決することにあるのである。

## 5 歴史と経験

過去という泉は深い。<sup>9</sup> 過去や未来を思い描くことができるのは極めて人間的な能力である。したがって過去の深さは人間の内面的な深さであり、言いかえれば人間の経験の深さであると言えよう。

私達は歴史の中に生き、私達の行動と思想とが新たな歴史を作っていく存在である。まさに歴史の認識は私達の経験の主要な構成要素となるものである。正しい歴史の認識も、誤った歴史の認識もそのままその人の経験の一部であり、歴史に対する無関心や無知さえもその人の現在までの経験となってしまうことは厳正な事実である。歴史を学ぶことは私達の経験を豊かにし、深めることであり、私達自身を形成することにほかならない。

生涯学習の対象となる他の分野の学問研究や文学・芸術に心を傾けることも私達の重要な経験となるものである。たとえば生物学、医学、数学、物理学、工学、建築学、社会学、経済学、哲学等々の諸学問を学ぶことによって、私達の経験が新しく豊かに作られるであろう。しかし歴史ほど私達自身と私達の住む社会に身近かで、私達の生涯に深く係わり、私達自身の歴史認識そのものが現代の社会に影響を与える学問は他にないと思われる。

哲学者の森有正氏は私達の自己とは自らの経験にほかならないこと、ひとりひとりの経験をかけがえのないものとして大切にすべきことを述べている。<sup>10</sup> 他者を大切にすることは、その人の経験を大切にすることである。その人の出会いを、学びを、日常の仕事大切にすることである。児童の教育はその人にとっても、その社会の将来にとっても重要であることは論を待たない。しかし人間の形成は青少年の時代にとどまらず、各人の経験の蓄積は生涯に及ぶのであるから、生涯学習を重んじることは現代社会における人間尊重の具体的な一歩なのである。

歴史を学ぶことは私達の経験を深めることであると共に、過去の人々の経験に参加しようとする営みでもある。歴史の認識は主観的であることをまぬがれない。しかし幅広く学ぶことによって、多くの人と共通の認識に達することは歴史を学ぶものの大きな課題となる。狭い主観的な歴史観から脱つするために、私達は世界の歴史に眼を開くことが必要である。日本の過去に生きた人々と共通の経験を持つようとする努力に加えて、世界の人々の過去への積極的な関心も非常に重要である。日本の歴史の全体像を捉えることさえ容易なことではないから、これは理想論とも言えるのであるが、たとえ不十分であってもアジアの歴史を、中東と西欧の歴史を学んで、世界の人々の心を、その経験の世界を理解する仕事は現代ほど必要な時代はないと言えよう。世界の様々な国の風土と歴史を学んで、そこに住む人々と喜怒哀楽を共にすること、そして共にこの地球に住む仲間であることを認識



しあうことが国際化時代における私達の心の基盤でなければならない。

人間形成をテーマとした世界的な古典である「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」においてゲーテは、人間の相互理解によってこの地球が人々の花園となると考えた。すなわち作中の人物をして次のように語らせている。<sup>11</sup>

「個人の歴史はその人の人格といえます。私の身に起こったことをお話ししますから、どうぞあなたも打ち明け話をして下さい。そして離れて住んでいても、いつまでも連帯をしてゆきましょう。地球はその中に山と川と町だけしか考えなければいかにも空虚なものです、心を同じくする、無言の内にも共に生き続ける人がそこにいるかと思うと、始めて人の住む花園となるのです。」

歴史を学ぶことはこのような、人々の相互理解を目指すものであり、平和への願いを具体的に実行する、私達のささやかな行動の一つと言えるのである。

## 6 世界の中の文化財 —過去から未来へ—

文化財は地域に結びついたものであり、地域作りにとって大切なものである。先人達の豊かなメッセージを伝える地域の文化遺産を、開発が進む中でどのように保存し後世に伝えるかは、自然環境の保護と共に現代の大きな課題となっている。多くの文化財の中で遺跡・遺物の場合で言えば、博物館あるいは史跡公園において後世に永く伝え、学問の上で、生涯学習の面で、そして地域作りにおいて活用を計らねばならない。

リゾートということが特に脚光を浴びている今日、文化財はその地域の観光資源としても注目されている。地域に存在する社寺や遺跡そして文化財を保存する博物館・美術館はその自然環境と一体となって魅力ある歴史的環境を形作り、多くの旅人を招くのである。それゆえ万一、リゾートのためにその地の大切な魅力である文化財や自然環境を壊すことになれば大きな自己矛盾である。

文化財は確かに観光資源として、旅において人々の心を潤すものとして大事な役割を果たすものである。しかも旅において人々が文化財に出会う時、文化財はその地の風土と歴史を様々に語りかけ、旅は最もよい生涯学習の場となるのだといえよう。

資料館・博物館はまず各地域における生涯学習の拠点として位置づけられなければならない。さらに観光地を旅する人々にとってもその地の博物館は生涯学習の場となるのである。旅人である私達は文化財を通して過去からいろいろなメッセージを受け取り、私達の新たな思想の糧とした上で、それを未来へ伝えていかねばならない。

文化財は地域に結びついたものである。しかしこれは狭い地域主義に閉じ籠ることを意味しない。むしろ文化財はより広い地域へ目を向ける窓の役割を果たすものである。

一つの文化財が作られるまでにはより広い地域の歴史の背景がある。日本の歴史、そして世界の歴史の流れを学んでゆくのも、文化財に向き合う生涯学習の課題といえる。

国際的な視野の必要性が言われながら、まだまだ私達日本人の国際理解は乏しい。府県の博物館においても海外の文化財が展示されるようになったことはその意味から意義が深い。文化財を通して国々への理解を深め、平和への願いを高めることができる。

21世紀が真近かに迫った世界は様々な不安定な要素に満ちている。この一年間の世界の変化は大きかった。ソヴィエト連邦の改革が進む中で、米ソの冷戦構造が変化し、東西両ドイツの統一と、東欧諸国の社会変革がうながされた。1990年8月、突然のイラクのクウェート侵攻により、深刻な湾岸危機が起こった。バルト諸国の独立運動を機にソ連の政治危機もまた深刻化している。私達の未来はまさに地図のない世界への旅である。

このような世界的な変革期にあたって私達の進路を少しでも展望するために、歴史を学ぶことが今日ほど重要な時代はないと思われる。21世紀への展望は私達が過去を誠実に学ぶ地平から開かれてくる。今日、文化財を調査し文化財から学ぶことは遠回りとも見える道ではあるが、さらに高い世界を目指す道としたいと思うのである。

(あんどろ・しんさく=当センター)

- 1 アンケートの集約は当センターの展示企画担当諸氏が行った。特に意見のまとめは中谷雅治氏が行ったものを活用させていただいた。
- 2 平易な展示構成は特に佐原眞先生の御指導によるものである。佐原眞「考古学をやさしくしよう」(「京都府埋蔵文化財論集 第1集」京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年)
- 3 生涯学習について京都府教育庁社会教育課岡花秀樹氏の御教示をいただいた。
- 4 新堀通也・西根和雄「日本における生涯教育論の系譜」(岡本包治・山本恒夫編「生涯教育とは何か―課題から実践へ―」1985年)
- 5 ポール・ラングラン著、波多野完治訳「生涯教育入門 第一部」1984年
- 6 ポール・ラングラン著、波多野完治訳「生涯教育入門 第二部」1984年
- 7 文部省「生涯教育―中央教育審議会答申―」1981年
- 8 浅井経子「生涯学習の構造」(岡本包治・山本恒夫編「生涯学習とは何か―課題から実践へ―」1985年)
- 9 トーマス・マン「ヨゼフとその兄弟達1」ヤコブ物語、序章
- 10 森有正「経験について」(「古いものと新しいもの 森有正講演集」1975年)
- 11 ゲーテ「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」第7巻5章